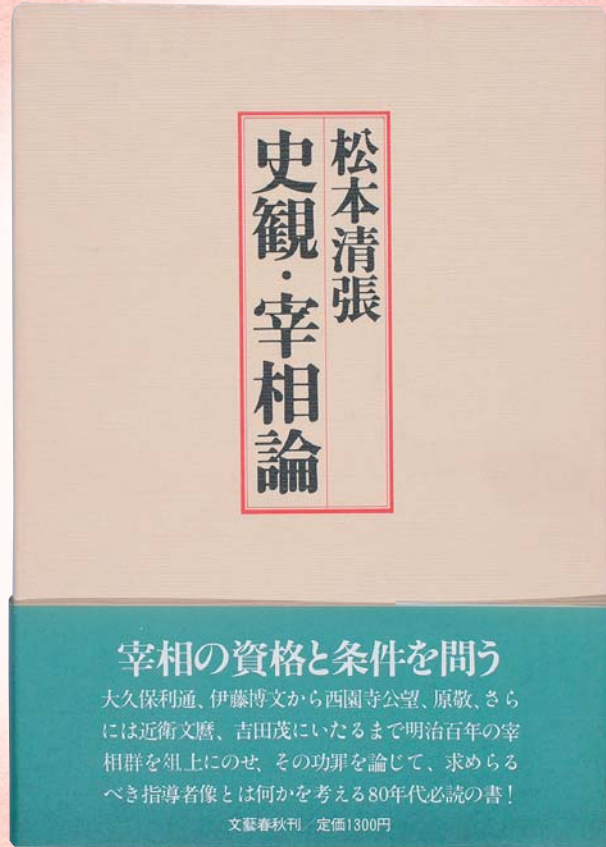


松本清張記念館

◆館報◆
2017.3
第54号

この「宰相論」を
書いて想うことは、
古来から結合においては
部族的、政治においては
官僚政治であるという
帰納である。



宰相の資格と条件を問う

大久保利通、伊藤博文から西園寺公望、原敬、さらには近衛文麿、吉田茂にいたるまで明治百年の宰相群を祖上にのせ、その功罪を論じて、求めらるべき指導者像とは何かを考える80年代必読の書!

文藝春秋刊 / 定価1300円

『史観・宰相論』

昭和55(1980)年 文藝春秋

初出:『私観・宰相論』(文藝春秋) 1980年8~12月号に掲載された

初単行本:『史観・宰相論』(文藝春秋、1980)

手に入りやすい本:ちくま文庫『史観宰相論』

目次

松本清張研究会第35回研究発表会 松本清張研究会の紹介	4
平成28年度後期特別企画展 「清張が描いた日本の近代」期間延長	2
20周年記念企画 あふれる想いを 清張オマージュ作品募集	4
展示品紹介「足立中学校校歌」	5
点描 作品の舞台を訪ねて	5
『松本清張研究』第18号発刊	6
友の会活動報告	6
トビックス	7

作品紹介

適格な宰相について、理想像を論じても紙上の創造にしかならず現実味がない。ゆえに史上の「宰相」にあたる為政者をふりかえり、将来の理想像を探す手がかりとしたい。主権在民の現代だから、国民は宰相の候補としてよい人物を見極めておかねばならない。

——そんな前置きから筆を起し、清張は大久保利通から論じ始める。

大久保利通は、初代の内閣総理大臣。伊藤博文に先立つ事実上の大宰相で、その没後、内政と外交は伊藤が、初期の財政は大隈重信が、軍隊・警察は山県有朋が、それぞれ引き継いだ。大久保以降の宰相は、大きくいうと開明・自由主義的な伊藤路線と、内治・軍事に力を注いだ山県路線に分けられる。大久保没後、山県は薩長藩閥を中心として官僚主義を強化し、伊藤ののちに政友会を引き継いだ西園寺公望、原敬が立憲制の確立につとめ、近代日本の土台が築かれたことを丁寧に描く。

大正期、そして昭和前期、戦後にいたるまで、歴代総理大臣を軸にしながら、日本の近代・現代史を追う。「昭和史発掘」「日本の黒い霧」でも丁寧に解説された事件が、そのときどきの内閣の判断を軸に論じられる。

「明治大正の政治談を好んだ亡父に捧ぐ」と、清張作品には珍しく献辞が掲げられたこの作品は、平成となった現代にも古びない普遍性を有した宰相論であり、歴史書ともなっている。

(学芸員 小野芳美)

講演

岡倉天心と明治三十年前後、
西欧美術派と日本美術派の
覇権抗争

『岡倉天心 その内なる敵』をめぐって

講師 大久保 喬樹

東京女子大学教授



はじめに 岡倉天心とは

松本清張は芸術とりわけ美術にも幅広い関心をもっていたことが知られますが、その真骨頂を示す作品のひとつに「岡倉天心 その内なる敵」という評伝があります。今回、私は天心研究家の立場からこの作品にとりあげられた当時の日本美術界や、その中で天心の状況についてお話ししようと思います。

岡倉天心は日本美術院の創始者であり、近代日本における伝統美術派の指導者となった人物ですが、その生涯の中で明治三十年前後は大きな転換点となった時期です。そこに至るまでの状況について順を追ってみていきます。

天心は幕末の文久二年(一八六二年)生まれましたが、森鷗外や坪内逍遙といった明治の近代文化を創り上げた人々と同世代にあたり

ます。幕府が瓦解していく頃に生まれ、物心つく頃に明治維新を迎えた彼らは、本格的な近代教育を受けた最初の世代です。明治政府は高等教育の中心として明治十年に現在の東京大学を発足させましたが、天心もその年に東大に入学しています。同世代の鷗外は医学を、逍遙も文学を同時期に東大で学んでいますが、彼らはそれぞれの専門分野で明治二十年以降の日本をリードしていくことになりました。

ところで天心の場合、同世代の他の知識人と比較して、ごく幼い頃から英語や西洋文化に触れていたという特徴があります。彼の父は元々福井藩士でしたが、幕末の開港地横浜に派遣され貿易に携わっていた頃に天心は生まれました。こうした周囲の環境や父の教育方針もあり、物心つく頃から日本語と並行して英語も習得していききました。つまり彼は「日本最初のバイリンガル」とも言えます。後年の天心の活躍を考えると、「外から日本を見つめる」という世界的視野もこの頃から養われたのでしょうか。

明治初期の日本美術界

明治維新後の日本の教育や文化は、まず欧米渡来の近代的な学問や文化を導入していくところから始まりました。開国したばかりの日本は、とにかく欧米に追いつかねばと必死だったのです。そしてその反動として廃仏毀釈運動に代表されるように伝統文化をなおざりにしました。美術の世界でも、それまでの伝統的な日本美術は打ち捨てられてしまい、西洋的・近代的美術がとって代わります。江戸期を通じて日本美術の中心であった狩野派の画家たちは没落し、高橋由一に代表されるような油絵や水彩といった西洋画が盛んになりました。新しく導入されたこの西洋画の特徴を端的にいえばリアリズムです。高橋由一

の作品で切手にもなった塩鮭の絵が有名ですが、これなどは理科の教材にもなりそうな写実的な描き方です。そして、その対極ともいえる狩野派などの空想的で浮世離れたような雰囲気のある絵は、急速に廃れていったわけ

です。こうした流れは、明治初期の美術教育の状況からも読み取れます。たとえば明治九年に開設された「工部美術学校」では、その名称からもわかる通り、殖産興業近代化の意図のもとに製図等の実用技術と連動する形で美術教育が始まったのです。そこでは芸術性よりも写真・写生技術を重視して精密な図を描くために、濃淡やぼやけで表現する毛筆ではなく、かつちりとした線が引ける鉛筆が採用されました。こうした西洋美術派が明治初期の美術界を牽引していたのです。

明治十年代 フェノロサとの出会い

こうした状況の中、東大在学当時の天心は美術に対してははじめは特別に関心を持ってはいなかったようです。そんな彼を美術の世界に引き込んだのは、お雇い外国人として来日していたフェノロサとの出会いでした。フェノロサはボストンのハーバード大学でドイツ哲学などを研究したアメリカ出身の学者であり、もともと美術の専門家という訳ではありませんでしたが、大森貝塚の発見で有名なモースの紹介で来日し、当時日本人からは打ち捨てられていた伝統美術に魅せられ、古美術商や寺院、画家のもとをまわるようになり、もともとに通訳兼アシスタントとして同行したのが、英語が堪能な天心だったのです。当初は天心も先生について行って洋食をご馳走してもらおうのが目当てだったというようなこともあったようですが、やがてフェノロサから受けた美術や哲学の考え方を吸収して、それが彼の芸術観、文明観の理論的な礎となりました。要約すれば、カントやヘーゲルの説いたドイツ観念論哲学を下地とした「芸術というものは物質的な現実を超越した精神的な世界を目指さねばならない」とい

う考え方であり、フェノロサはこうした美学に照らして狩野派の絵を評価し、講演等でその素晴らしさを訴え、それを天心が通訳して人々に広めていきました。こうして彼らは二人三脚で、日本の伝統美術に再び光を当てていったのです。

天心は明治十三年に東大卒業後、文部省に入省、やがてトップ官僚として美術行政を牽引していきりますが、この頃から小山正太郎ら西洋美術派との対立が本格的になっていきます。一例を挙げると、当時文部省主催の美術展覧会において、書道も対象にすべきか否かで揉めた「書ハ美術ナラズ論争」があります。西洋と同じパターンしか認めない小山らの「書道はアルファベットと同様の文字記号を書くだけの実用技術にすぎず、美術としては認められない」という主張に対し、天心は「美術にはその国や時代によって様々なパターンや考え方があってよいのであり、西洋でも古い建築が実用物でありながら美術として認められているように、書道もまた立派な美術として鑑賞の対象となり得る」と主張して対立したのです。

こうした対立は次第に周囲の政治家たちをも巻き込んで発展していきますが、ここで天心はしたたかな政治的才能を発揮します。彼は文部省の上司だった九鬼隆一を通じて伊藤博文を展覧会に招き、説得して伝統美術の再興を軸とした施策を着々と推進していきま



またこうした調査評価に基づいて国宝制度を創設し、保護や普及の枠組みを実現しました。それが天心やフェノロサにとつての真の近代化だったのです。

明治二十年代 隆盛から凋落へ

やがて明治二十年前後になると、日本では憲法や国会といった近代的な国家制度の本格的な整備が進み、その一環として芸術分野での専門高等教育機関が設立されることになり、その準備として天心とフェノロサは欧米視察旅行に出ますが、天心はとりわけイタリアのルネサンス美術に感銘を受け、日本伝統美術を軸にして日本のルネサンスⅡ再生を指そうと確信したのです。

帰国後の明治二十二年に天心は東京美術学校を開校し、ここでは日本美術のみを取り扱うという方針のもと、横山大観や菱田春草といった日本画家たちを育てました。

しかし、まもなく西洋美術派の巻き返しが始まります。日清戦争前夜の明治二十六年、天心は学校開設事業が一段落したところで突然、半年間におよぶ中国旅行に出発します。当時の日本では福沢諭吉に代表されるように「近代化に遅れて凋落する中国から学ぶものはもはやない」という考え方が大勢であり、加えて美術学校の方もこれからという時期だったため、この中国行きは周囲の理解を得られない状況でしたが、天心はそれを押し切ることかたちで出発しました。そして実際に現地に入ってみると、やはり清朝末期の混乱で治安や環境も良くない中国奥地の旅路は困難をきわめ、外国人と怪しまれないよう辮髪や中国服といった現地人の姿で過ごしたり、追いつぎに遭ったりと大変なものだったようです。その反面、実際に中国現地の風土習俗に接したこのときの経験は、後の著書「東洋の理想」や「茶の本」で説かれる東洋文明観「アジアはひとつ」に代表される一の形成をもたらすことになる貴重な糧となったのです。

ところがこの中国旅行で天心が留守にしていた間、日本の美術界では後の天心追放につ

ながる動きが起こっています。その原動力となったのはフランスで本格的に西洋近代美術を学んだ黒田清輝らの一派です。彼らは外光派と呼ばれる画風を広めました。これはミレに代表されるような19世紀前半の自然光の効果をとりにんだ写生の技法です。先述の高橋由一や小山正太郎らを明治の西洋美術「旧派」と呼ぶのに対し、黒田清輝らを「新派」とも呼びますが、今度はこの新派の画家たちが新勢力として台頭してきたのです。こうした状況下、天心にはプライベートでも問題が続いていました。九鬼隆一の夫人である波津子や、天心の異母姪である貞との不倫関係がスキャンダルとして取り沙汰され、こうした状況が重なり、結果的に天心は明治三十一年に東京美術学校の校長を非職とされるところにまで追い込まれてしまいます。このあたりをめざし合いについて清張は克明に描いているのです。

明治三十年代 日本美術院設立から海外へ

その後フェノロサを通じてボストンの知識人たちから多額の寄附を集めた天心は、弟子たちを引き連れて民間団体である日本美術院を設立して自分たちの理想を追求していきま

す。単に伝統的な狩野派のスタイルを墨守するのではなく、新しい日本美術の伝統をつくり出そうとするのです。先述の新派の画家たちの外光派スタイルに対抗し、さらにその先に向ってモネやドガなど19世紀後半の印象派の技法を取りこんだような動的な空気感のある画法ですが、しかしこの革新的な画風は、今度は伝統的な狩野派のパターンを守ろうとする日本画家たちから「朦朧画」とか「お化け絵」などと揶揄されて激しく対立し、いわば四面楚歌のような立場に天心たちは追い込まれていくこととなります。

こうした状況に嫌気がついたので、天心はやがて美術院の経営からも遠ざかっていき、明治三十年代中頃にはとうとう日本を脱出してしまいます。インドの詩人タゴールと親交を深めアジアの植民地解放運動に携わった

り、ボストン美術館で東洋美術部門の責任者を務めたり、「茶の本」でお茶の精神を通じて日本文化のあり方を世界に広めたりと、後年は海外での活動に焦点をしばり、休暇で日本に戻ってきた時には人里離れた北茨城の海際に建てた隠居所にこもって隠者のような日々を過ごすこととなります。

おわりに

作家松本清張は主に明治三十年前後の天心をとりまく状況に焦点を当ててこの評伝を書きました。そこでは主として今回お話ししたような美術界や文部行政をめぐる覇権抗争、それに絡んだ女性関係のスキャンダルといった背景が鋭く追求されていきます。芸術というものも生々しい実生活、時代状況、人間関係から切り離して理解することはできないという清張らしい信念が存分に発揮された異色の評伝として圧倒されました。

要旨

松本清張作品には数多くの鉄道乗車場面が出てくる。では一体、作中に登場する鉄道乗車場面はどのくらいあるのか、それを合計すると何き位に達するのか、最初に乗ったのは誰なのか、といった疑問について「乗り鉄」の観点から調べてまとめた。

清張の小説で明治以降を舞台とした約320作品を読むと、そのうちの168作品に鉄道乗車場面があり、ほぼ半分の割合となる。先に結論を述べると、国鉄・JRや私鉄等も含め、清張作品の登場人物が乗った距離の単純合計は17万9300キ余りとなる。しかし総距離数よりも、ある路線・区間を誰が初めに乗ったか、という「初乗り区間」の方が重要であろう。初乗り区間の広がり、清張世界の面的な広がりを示すからである。初乗りが登場するのは100作品であり、これら初乗り距離の総合計は、旧国鉄・JR 1万2046.4キ、私鉄等1479.1キ、の計1万3525.5キとなる。

今回の研究では、初乗り区間ありの作品群を発表年代順に並べ、時期ごとの特徴も考察した。

特に初期作品における鉄道乗車場面の役割を挙げると、まずディテールを書き込んで文章にリアリティやリズム感を与えることである。その小道具としての鉄道を、清張はデビュー作の『西郷札』から使い続けたのだと考えられる。また『或る「小倉日記」伝』のように、鉄道乗車場面を書くことで、登場人物の心理や心象風景を映し出すという手法も見られる。そして『父系の指』等では、社会の有り様について鉄道乗車場面を通じて描くという、清張の得意技が早くも出てきている。

これも比較的早い段階で、清張作品と鉄道乗車場を考える際の基本的なパターンが出揃

研究発表
清張鉄道1万3500キ

講師 赤塚 隆二
元朝日新聞記者



松本清張研究会について

松本清張研究会は、松本清張およびその多岐に渡る創作活動の研究を進めることによって、清張文学の全貌を明らかにし、その魅力を広く伝えていくことを目的としています。全国の大学や研究機関の研究者を中心に、現在六十余名の会員で構成され、様々な活動を行っております。

- 研究発表会の開催
(年二回、6月・12月)
- 講演会などの主催事業の開催
- 記念館の運営への協力
(情報提供、資料整理等)

詳細については記念館にお問い合わせ下さい。

う。「張込み」では旅への誘いを書き、昭和三〇年代の人々の遠くへ行きたいという願望を先取りした。「箱根心中」では男女の愛情が展開される場として、「顔」では犯罪の手段としての鉄道が登場する。それ以降の鉄道乗車場面がある清張作品でも、これら「旅への誘い」「男女の愛情」「ミステリー」という三要素のうちいずれかが、時には複数出てくる。鉄道トリックとしてどのような類型があるかもわかる。「点と線」では共犯者が別々に行く「現地集合型」や、鉄道旅とのアリバイを申し立てて実は飛行機で移動する「空陸差し替え型」が登場する。その他にも「ゼロの焦点」では単なる足跡消滅トリックに留まらず、鉄道旅が本質的に持つタイムトンネル性についても見事に描かれている。

清張作品には、時代を先取りしていたところも多い。例えば初乗り最長記録は、「着い描点」の雑誌社編集部長である若い女性の合計1100キロ余りであるように、これは女性が社会に進出し始めた時代を象徴している。清張作品の鉄道乗車場面を読み解くことは、日本の国土の変化を見るという点で意義があり、その変化の理由を考えることにもつながる。飛行機や新幹線で東京と地方は短時間で結ばれるようになったが、実は地方同士は少しも近くなっていない。現代日本には国土を見る目が欠けているのではないかと考える上でも、清張作品は今日的意義を持ち続けている。

企画展期間延長のおしらせ

現在開催中

平成28年度
後期特別企画展

清張が描いた日本の近代

豊穡なる小説群

好評につき、開催期間を **5月7日(日)** まで延長します。



明治・大正期を舞台にした短編小説、論評や評伝も数多くあります。こうした作品を書くことができたのは、歴史への深い関心と、独自の「史眼」の確立がありました。

この企画展では、清張は“社会派推理小説、以外にも豊かな作品世界があることをご紹介します。



企画展会場には、大きなトンネルが設置されています。歴史を読み解き、真実を見通そうとした清張の「史眼」をイメージしたものです。



あふれる想いを… ②

今回登場していただくのは、昨年4月に就任した丸田圭一・松本清張記念館館長代行です。記念館開館の際にも庶務係長としてこちらに勤務していた丸田館長代行に、10数年ぶりに記念館へ戻ってきた今の思いを綴っていただきました。

「開設当時の思い出とこれから」

【自己紹介】

私は、20年前の平成9年4月に、市文化部の記念館開設準備の庶務担当係長として、この記念館建設プロジェクトにかかわりました。当時、翌年の夏の開館に向け急ピッチで施設工事や展示作業が進められている中、私自身は、まさに霧の中からのスタートでした。五里霧中の中、施設の工事進捗状況や内容の確認をはじめ、常設展示の作業会議への参加、施設の名称・入館料等の検討、学芸員の採用等の開館準備に携わりました。そして、平成10年8月の開館後約5年間、庶務係長と副館長を経験しました。



丸田 圭一
松本清張記念館
館長代行

【当時の思い出】

一番の思い出は、開館当日の記念式典後の15時からの一般公開に、約2時間で700人を超える来館者があり、常設展示室は身動きができないほどの多くの清張ファンで埋め尽くされたことです。そして、開館前後の各メディアの大々的な報道もあり、開館記念イベントに多くの人で賑わい、偉大な国民作家松本清張の人気に改めて驚かされたことです。当時の私は、ようやく開館したという安堵感と同時に、記念館のスタッフの一員として、これからの責任の重さを感じました。その後、清張ファン対象の友の会の設立、清張没後10年記念事業の実施、博物館登録等に楽しみながら取り組んだことが深く印象に残っています。当時、藤井館長からは、活動し続けること、限られた人と予算で

仕事をし且つ負けないこと、真摯に取り組めば必ず結果がついてくること等について学ばせていただきました。

【故郷との絆が記念館建設へ】

この記念館誘致建設プロジェクトは、平成4年末から始まり、決して平坦な道ではなかったと思います。地元文化関係者や青年会議所をはじめ多くの市民の皆さんの思いや支えがあってようやく開館の運びとなりました。これは、松本清張が作家として超多忙な中にも小倉とかかわり続けたという、故郷との絆があったからこそ、小倉への記念館誘致の気運が高まり建設に繋がったものと確信します。そして、今の記念館があるのは、何よりも、松本家の全面的な協力、そして清張の仕事を知り尽くし本プロジェクトを牽引された藤井館長（現名誉館長）と、かねてから松本家との交流があった小野昭治氏（顧問）というかけがえのないお二人の存在、さらには多くの関係者の協力と北九州市の英断があったからです。

【これからの記念館】

このように、記念館は、いろいろな人の思いが重なり繋がりが全国に誇れる館として成長し進化し続けています。私は、藤井名誉館長をはじめ関係の皆様がこれまで築き上げたものを継承しつつ研究機能の充実をめざすとともに、市民の皆さんをはじめ全国の清張ファンを対象とした普及事業にも一層力を注ぎ、名誉館長や顧問、市関係局等のご指導をいただきながら、精一杯力を尽くします。そして今年には清張没後25年、来年は開館20周年。皆さんとともに盛り上げることができるよう、しっかりと準備していきたいと思っています。



清張オマージュ作品募集

さっそく情報をお寄せいただき、ありがとうございます！

松本清張記念館では、開館20周年を記念して「清張オマージュ展」(仮)を開催する予定です。松本清張や、清張作品への愛を、文章や絵、漫画などの作品で表現したものを、できるだけ多くご紹介したいと思っていますので、情報をお寄せください。今年いっぱいくらいは募集する予定です。 **お待ちしております!!**

例えば……

★この前読んだ小説に清張が出てきたよ!

★清張の本が出てくる漫画があった!

★著名人が、好きな作家に清張の名前を挙げていた——など

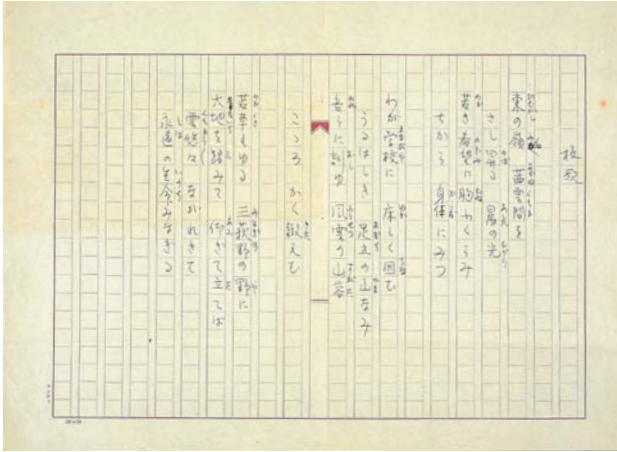


オマージュ: homage (フランス語) とは ①尊敬、敬意。②賛辞、献辞 「広辞苑」より

応募・お問い合わせ先

〒803-0813 北九州市小倉北区内2-3
松本清張記念館 オマージュ係
TEL093-582-2761 FAX093-562-2303
E-mail shi-seichou@city.kitakyushu.lg.jp
※当館の公式ウェブサイト、トップページから送信できます。

足立中学校校歌



歌詞原稿



足立中学校のレリーフ

全国の松本清張ファンの皆さんは、清張作詞の校歌があることをご存知だろうか？

地元・北九州市では、清張が校歌を手がけた市立足立中学校が、平成二八年度に開校七〇周年を迎え、話題になった。

学校の沿革によると、校歌が制定されたのが昭和二十七年のこと。どういった経緯かは不明だが、当時、長女が在籍していたことが縁で、清張に作詞の依頼があったものと思われる。

展示している歌詞は、原稿用紙一枚に、三番までの詞が並んだもの。これにはもう一枚続きがあり、次のような校長宛の短い手紙が添えられている。

（大変遅くなりました。申し訳ありません。別紙の通りに一応まともりましたが、悪いところは御修正願います。（後略）

これを受けて、校歌は清張の作詞を若干変えたものになったが、六五年間、作詞松本清張として代々、足立中学校生に歌い継がれてきた。

現在、この足立中学校校区をはじめとする、清張が戦後から上京するまで住んでいた黒住町の住民による顕彰活動が盛り上がりを見せている。命日には、地元有志による「しのぶ会」が開催され、松本家が住んだ地域にある黒住公園は、「くろぞみ清張公園」に名称変更された。清張が愛した故郷、今その故郷に、清張が愛されている証が、市民によって実りつつある。

（学芸員 柳原暁子）

作品の舞台を訪ねて

「或る『小倉日記』伝」②—母の無償の愛

耕作の将来のことを考え、母ふじは仕立屋に弟子入りをさせるが、三日と辛抱できなかつた。以後、耕作は死ぬまで収入のある仕事につけなかつた。

その特異な風貌と、吃りで発音が不明瞭な言葉遣いのため、頭脳明晰ということを隠したまま人付き合いを行っていた耕作が、小倉の白川医師との出会いにより、森鷗外の「小倉日記」を知ることになる。そして、耕作は、小倉にいた頃の鷗外について調べることに全身を打ちこみ、一生これに取り組むと決める。そんななかで、鷗外の友人であった「安国寺さん」が福岡県企救郡西谷村護聖寺の住職として生涯を終え、その未亡人が寺の近くで健在であることを知り、耕作は会いに行く。

そこは四里以上あつた。二里のところまではバスが通うが、それから奥は山道の徒歩である。耕作は弁当のはいった鞆を肩から吊し、水筒を下げ、わらじをはいて出かけた。ふじが気づかづつたが、大丈夫だといつて出発した。

バスを降りてからの山道はひどかつた。その上、一里以上は歩いたことのない耕作にとつて普通人の十里以上にも相当した。何度道端に腰を下ろしたか知れなかつた。
（文藝春秋「松本清張全集35」『或る『小倉日記』伝』より）

博労町があつたところから護聖寺まで、道路が整備された現在でも約十三キロある。バスを降りてから二里八キロの当時の山道を、身体が不自由な耕作がどのように歩いていったのだろうか。その距離感を知りたくて、護聖寺へ行ってみたい。

護聖寺は、小倉南区の辻三に昔ながらのたずまいで建っていた。すぐそばには、三岳



耕作が何かに打ち込んでいる姿をみるのが、ふじの生きがいだつたのではないだろうか。この護聖寺から見渡す風景の中に、こんな遠くまで息子に付き添ってきた母の、無償の愛だけがしっかりと感じることが出来る。
（檜垣一美）

梅林公園があり、梅の季節にはかなりの賑わいを見せるが、梅の季節を過ぎた今はひっそりとしている。自然あふれる風景を眺め風に吹かれていると、耕作がぼちぼち歩いていてもおかしくないような錯覚におちいる。大変な思いをして歩いてきた耕作に、この土地の風は優しくあつたのだろうか。苦勞してせっかく会えた未亡人の弟に話は通じず、未亡人にも会えず耕作は四里の道を引返す。

ふじは帰ってきた耕作の姿を一眼みると、その疲れきつた顔色で、どういふ結果だかすぐ察してしまつた。（中略）彼がどういふ仕打ちをされたか、ふじにはすぐ分かつた。不惑でならなかつた。「明日、もう一度行つてみよう、お母さんも一緒にね」
（文藝春秋「松本清張全集35」『或る『小倉日記』伝』より）

身体が不自由な耕作が、とぼとぼ歩いて帰つたことを思うと、母でなくても切ない想いで一杯になる。

翌日、人力車を雇い、ふじもいっしょにこの地まで来て、無事に未亡人の話を聞く。これをきっかけに、ふじは耕作の通訳のような形で調査に同行するようになるのだ。

研究誌「松本清張研究」 第十八号発刊

特集 清張と鉄道

対談

行間を鉄道が走る

清張作品時間旅行 原 武士・酒井順子

論文

清張ミステリーと中国・九州地方の鉄道 綾目広治

推理小説の中の通勤電車 仲正昌樹

松本清張の従軍期の鉄道 南 富鎮

「ヤングレディ」の旅 久保田裕子

「旅」と「点と線」 松本常彦

旅と鉄道と影の映像 山田有策

清張「顔」をめぐる 山田有策

エッセイ

列車に乗る子供たち 赤塚隆二

「小倉発」わが絵人生のはじまり 田中時彦

越境者の覚悟 森 達也

投稿

『象徴の設計』小考 多田康廣

松本清張のみた「軍人勅諭」における命令の拘束性 多田康廣

無力化された真相の先に 鶴田武志

松本清張「霧の旗」に見る更新されない日常の正体 鶴田武志

記念館研究ノート

消えた男をめぐる 柳原暁子

記念館だより 編集後記

友の会 活動報告

●清張サロン

清張サロンは、清張作品や清張に関する話題をテーマに、講師を招いてのお話や参加者との意見交換・交流を目的に開催しています。昨年11月と2月に、下記のとおり2回開催しました。第2回清張サロンは、松本清張と藤沢周平の「半生の記」をテーマに二人の作家の共通点などについて話していただきました。いずれも参加者の皆様に清張の魅力に触れて楽しんでいただくことができ、充実したサロンとなりました。

第2回 11月26日(土) 14:00～16:00
参加者 73名
・会場 記念館 企画展示室
・テーマ 松本清張と藤沢周平
『半生の記』から魅力を探る
・講師 加島巧氏(長崎外国語大学教授)

第3回 2月3日(金) 14:00～15:00
参加者 39名
・会場 記念館 地階ホール
・テーマ 特別企画展「清張が描いた日本の近代—豊穰なる小説群」より
・講師 小野芳美氏(記念館・学芸員)



●生誕祭

12月15日(木) 参加者 53名
記念館 企画展示室

松本清張さんの107回目の誕生日を友の会会員でお祝いする「生誕祭」を開催しました。今回は、初めて松本陽一さん(清張さんの長男)にご参加いただきました。ご挨拶の後、友の会の小林慎也会長と一緒に、清張さんに代わってケーキのローソクを吹き消していただきました。

歓談の後、丸田館長代行による記念館建設当時のこぼれ話や事業紹介などがあり、最後に、紙芝居を鑑賞しました。この紙芝居は、小倉時代の清張さんを描いた物語で、「清張さんの道を歩く会」のメンバーで構成する紙芝居一座が語り手となり、清張さんへの想いと温もりが感じられる作品でした。

各テーブルにはケーキとコーヒーが配られ、和気あいあいと会員同士の交流も深まる生誕祭でした。



●友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集●

松本清張記念館友の会は8月1日～翌年7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、「友の会だより」の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

友の会入会のお申し込みは、松本清張記念館友の会事務局まで

TEL. 093-582-2761

取材に行ってきました

風光明媚な景勝地として知られる耶馬溪（大分県中津市）。清張は、後年いくつもの作品やエッセイにその風景を織り込んでいます。清張は、朝日新聞社時代そして作家になってからも、この耶馬溪に立ち寄っています。

大正時代からの歴史を誇る温泉旅館「鹿鳴館」は、深耶馬溪の渓谷と奇岩が見渡せる眺望スポット「一目八景」のすぐそばにあります。清張は、「青春の彷徨」（原題「死神」、昭和28年）で、その屋号のまま舞台に選んでいます。「年頃の姉妹娘」として作中にも登場する深草多江子氏は、「少なくとも4回は訪れ、いつも1人で投宿していた清張を覚えている。文学に詳しくた女将と森鷗外について話していた姿を覚えている。」と懐かしそうに話してくださいました。この地は清張にとっても思い出深い地と言えるのではないのでしょうか。



深草多江子氏と甥の相良修一朗氏

現在の『鹿鳴館』

講演に行ってきました

平成28年度に、松本清張の魅力をより多くの市民に知っていただくために、清張の人物や作品、故郷への想いなどをテーマとした、講座・講演を行いました。

日付	主催者・会場等
11/11	生涯学習総合センター（市民カレッジ）
12/6	小森江東市民センター
12/9	北九州市立大学
12/16	松ヶ江北市民センター
1/10・24	老松市民センター
2/1	北九州市観光協会
2/3・10	北九州年長者研修大学校（穴生学舎）
2/4・18	八幡西生涯学習総合センター（ひとみらいプレイス）
2/18	若園市民センター
2/23	清水市民センター
3/8	白野江市民センター

ドラマ上映会を行いました

昨年の11月と12月に、「ドラマ上映会」と「オリジナル映像上映会」を記念館の企画展示室で行いました。「ドラマ上映会」では、NHKから寄贈されたドラマ14作品のうち「一年半待て」などの4作品を8日間上映しました。また「オリジナル映像上映会」は、記念館制作の「火の路へ」と「動画ドラマ『点と線』」を10日間上映しました。

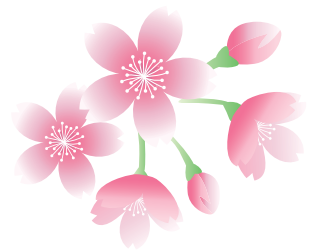
29年5月にもドラマ上映会を行なう予定です。

●編集後記●

記念館がある小倉城周辺はすっかり春の装いになり、1年中で1番賑やかな季節を迎えています。

今年は清張没後25年。4半世紀という時を経てもなおお色あせない作品の素晴らしさ、そして、それらの作品をうみだした作家松本清張の凄さを、改めて感じます。

特別企画展「清張が描いた日本の近代」に展示されている創作ノートや直筆原稿を見ると、その力強く勢いのある筆力に圧倒されてしまいます。5月7日（日）までの開催となりました。ぜひ、記念館に足をお運びください。（K.H）



イラスト：山藤 章二

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区内2番3号
TEL 093 (582) 2761
FAX 093 (562) 2303
<http://www.kid.ne.jp/seicho>
制作（株）西部毎日広告社

- 開館時間 午前9:30～午後6:00（入館は午後5:30まで）
- 休館日 年末（12月29日～12月31日）
- 観覧料 一般/500円（400円） 中・高生/300円（240円）
小学生/200円（160円）（ ）は30人以上の団体
- アクセス JR：小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からはバスをご利用いただくと便利です（小倉城・松本清張記念館前下車）
車：北九州都市高速、大手町ランプより5分

